はじめて読む正信偈（しょうしんげ）

井上尚実

本書について

本書は、真宗大谷派が発行する機関紙『同朋新聞』（二〇一九年十一月号～二〇二二年七月号）に連載された井上尚実氏（大谷大学教授）の「はじめて読む正信偈」（全三十三回）に加筆・修正をいただき、書籍化したものです。

朝夕のお勤めに用いられるなど、真宗門徒にとってなじみ深いお聖教である「正信偈」。そこに込められた親鸞聖人のおこころを学び、あじわうための入門書となることを願い発行しました。はじめに『真宗大谷派勤行集』（赤本）の該当箇所を掲載し、書き下し文、現代語訳、偈文にこめられた聖人のおこころを順に尋ねていく内容です。

本書をくり返しお読みいただくことをとおして、親鸞聖人の言葉を大切にいただき、日々のお勤めがさらに意義深いものになることを願っております。

東本願寺出版

『はじめて読む正信偈』　目次

はじめに ―― 1

「総讃（そうさん）」

本願を信じ念仏もうす ―― 7

「阿弥陀仏の章」

法蔵菩薩の願い ―― 13

この上なくすぐれた願い ―― 19

本願の成就をあらわす光 ―― 25

本願のはたらき ―― 33

念仏成仏すべし ―― 39

「釈迦仏の章」
釈迦如来の真実の教 45
信心による平等な目覚め 53
曇りの日の明るさ 61
他力の信心による速やかな目覚め 69
泥中に群れ咲く白蓮華 75
真実信心の有り難さ 83
「七高僧の章」
本願念仏の歴史 89
―龍樹―
龍樹菩薩と「空」の思想 95
大乗のこの上ない教え 101
易行の念仏による速やかな目覚め 107

—天親—
『大無量寿経』の真実 113
一心に帰命して正定聚の数に入る 119
往生して仏と成り衆生を利益する 125
—曇鸞—
自力から他力へひとたびの回心 131
往相・還相の回向は如来の本願の働き 139
信心発起による他力の目覚め 145
—道綽—
聖道門から浄土門へ 151
大悲の本願による悪人の成仏 157
—善導—
善人も悪人も本願はすべてを救う 163
真実信心は澄みきって壊れないダイヤモンドのような心 169

—源信—
専修念仏によって真実報土へ　177
極重の悪人を摂め取り照らし続ける大悲の光　185
—法然—
本願念仏による平等な目覚め　191
他力の信心による速やかな目覚め　199
「結勧」
共に同じ心でただ信ずべし　205
おわりに　212

［凡例］

・本文中の『真宗聖典』とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。

はじめに

私は長野県の田舎にある真宗大谷派寺院の生まれで、幼い頃から本堂やお内仏のお勤めの場において、まず耳から「正信偈」に親しみました。その頃私が聞いていたお勤めの声は、住職であった父や家族、お寺に集まったご門徒さんたちの声でした。60歳を過ぎた今も「正信偈」を読むと、当時耳にした身近な人たちの声が聞こえてきます。小学校に進み、字が読めるようになると、『真宗大谷派勤行集』（赤本）を手にするようになりましたが、難しい仏教語や固有名詞を含む漢文の意味はほとんど理解できませんでした。ようやく声と意味が結びつくようになったのは、「正信偈」を学び、自分なりに真宗の教えと向き合うようになった30歳の頃です。声と意味がつながるところには「はじめて読む」喜びがあります。

本書では、親鸞聖人が付けられた返り点や送り仮名に従って、「正信偈」をはじめから少しずつ読んでいきたいと思います。タイトルに〝はじめて読む〟

とついているのは、漢文であるために分かりにくい「正信偈」の詩句の意味を学ぶことをとおして、身近に味わってほしいという願いを表しています。すぐれた詩の一節を口ずさむように、日々の生活の中で、ふと「正信偈」の一句が思い浮かび、それによって、暗く閉じていた心に陽が射し込み、視野が開けて明るくなる。そのように真宗の教えにふれて目覚めていく手がかりを、多くの人と共有することができればと思います。

「正信偈」は、親鸞聖人が書き表されたものの中で最も広く親しまれているお聖教で、親鸞聖人の主著『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』六巻のうち「行巻」の結びに記されており、直筆の原稿が現存します（口絵参照）。七文字を一句とし百二十句からなる漢文の定型詩で、八百四十字の中に真宗の教えの根幹が印象深く詠われています。「正信偈」と略して呼ばれますが、親鸞聖人がつけられた正式の名称は「正信念仏偈」です。「偈」というのはインドの古い言葉であるサンスクリット語の「ガーター」を音写した仏教語であり、「仏の徳や教えを讃える詩」を意味しています。親鸞聖人は「信心と念仏の讃歌」

として深い喜びと感謝の念を込めてこの詩を編まれたのです。

親鸞聖人はこの「正信偈」に先立って、次のように書かれています。

しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閲して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰わく　（「偈前の文」『真宗聖典』二〇三頁）

ここで「大聖」というのは、今から約二千五百年前のインドにお生まれになって悟りを開かれたブッダ、お釈迦様（釈尊）のことです。「真言」とはお釈迦様の真実の言葉、すなわち『大無量寿経』という経典に説かれた阿弥陀仏の本願のことです。親鸞聖人は、この本願を最も大切な依り処として「正信偈」を書かれました。

次の「大祖」というのは、インド・中国・日本の三国において本願念仏の教えを受け継ぎ広められた七人の高僧のことで、具体的にはインドの龍樹菩薩と天親菩薩、中国の曇鸞大師・道綽禅師・善導大師、そして日本の源信僧都と源空（法然）上人のことです。親鸞聖人は、これら三国七高僧による解釈の伝統をとおして、本願念仏の教えこそが生きとし生けるものに平等な目覚めをもた

らす仏教であることを確信されたのです。

「正信偈」の大まかな構成についてみてみますと、まず前半の四十四句には『大無量寿経』に説かれる阿弥陀仏の本願の由来と、本願を信ずる念仏者の救いのあり方が詠われています。「印度西天之論家」以下後半の七十六句には、七高僧がそれぞれ念仏者として顕らかにされた教えが要約して讃えられています。そして、最後は「共に同心に、ただこの高僧の説を信ずべし」と、念仏を勧める親鸞聖人の言葉で結ばれます。全文を通して、すべてのいのちを救うために起こされた阿弥陀仏の本願がお釈迦様によって説かれ、インドから中国を経て日本へと広まり、私たちの「南無阿弥陀仏」の声となるまでの壮大な経緯が讃えられているのです。

この「正信偈」を真宗門徒の勤行の中心に位置づけられたのは本願寺第八代の蓮如上人です。真宗門徒が声を合わせて読むのにふさわしいお聖教として「正信偈」を選ばれ、「正信偈・念仏・和讃」という日々のお勤めの基本形を定められたのです。それ以来五百年以上にわたり、「きみょーむりょーじゅーに

ょーらーいー、なーむーふーかーしーぎーこー」と幼い子どもからお年寄りまで一緒に声を合わせてお勤めすることが、浄土真宗の伝統を形作るとともに真宗門徒を育(はぐく)んできたのです。

これからできる限りやさしい言葉で「正信偈」の意味を味わっていきましょう。

本願を信じ念仏もうす

【該当箇所】（『真宗大谷派勤行集』三頁）

歸命無量壽如來

南無不可思議光

【書き下し】（『真宗聖典』二〇四頁）

無量寿如来に帰命し、

不可思議光に南無したてまつる。

【現代語訳】

限りないいのちの如来を最も大切な依り処にいたします。

思いはかることのできない光の仏を真の依り処にいたします。

親鸞聖人（一一七三～一二六二）は「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」（『歎異抄』『真宗聖典』六二七頁）という法然上人の教えに導かれ、すべての人に平等な救いをもたらす「ただ念仏」の仏道を歩まれました。「正信偈」は、その「ただ念仏」の教えに出遇われた深い感銘を親鸞聖人が漢文の定型詩で表現されたもので、全文をとおして、念仏の救いと、それを伝えてくださった七高僧の教えが讃えられています。

「帰命無量寿如来　南無不可思議光」というはじめの二句は「総讃」あるいは「帰敬」と呼ばれていて、「南無阿弥陀仏」と同じ意味をもっています。「南無」はインドの言葉「ナマス」の発音を漢字で表したもので、中国語に訳すと「帰命」あるいは「帰依」になります。日本語に訳せば「尊いものとして敬い重んずる、信頼して従う、真の依り処とする」というような意味になります。普段のお勤めの際には、ご本尊に向かって合掌した後、まず、※調声人が「帰命無量寿如来」と発声し、その後、「南無不

可思議光」から皆で声を合わせて読みはじめます。ですから、この二句については「正信偈」の中でも、特に印象に残る部分ではないかと思います。

この「無量寿如来」と「不可思議光」は、いずれも阿弥陀仏のことです。はじめの「無量寿」とは「阿弥陀」というインドに由来する言葉を中国語に意訳したもので、「はかり知れない寿命」を表しています。この言葉は、苦しんでいるものがいるかぎり永遠にはたらき続ける阿弥陀仏の大いなる慈悲を表しています。「如来」というのは、「真如より来生する」すなわち「真実の世界から来てくださった」という意味で、仏の尊称です。次の「不可思議光」も「阿弥陀」の意味がわかるように中国語に訳した言葉で、人間には思いはかることのできない仏の無限の智慧を表しています。この二句には、阿弥陀仏は、私たちの心の闇がどれほど深くても、必ず照らし出してくださる光の仏であることが表されています。

「正信偈」は全て漢文で書かれているため大変難しい印象を受けますが、

このように、言葉の意味を一つひとつ明らかにしていくと、冒頭の「帰命無量寿如来　南無不可思議光」は、「南無阿弥陀仏」と同じ意味をもった念仏であることがわかります。そして、この冒頭の二句をやさしい言葉に訳したものに次のような詩があります。

つきせぬいのちの　ほとけに　きみょうし
はてなきひかりの　ほとけに　きみょうす

（「正信讃」『真宗大谷派勤行集』一二五頁）

この「正信讃」のようなやさしい言葉の詩に訳してみますと、親鸞聖人が冒頭の二句に込められたおこころを、あらためて感じることができるのではないでしょうか。そして、言葉としての念仏の重要なポイントは、そこに「わたし」という主語がないことです。もとのインドの言葉にも、漢文の「南無阿弥陀仏」「帰命無量寿如来　南無不可思議光」にも、主語はありません。声に出して念仏する時には、日常の「わたしは」という自己

中心的な思いが退(しりぞ)き、阿弥陀仏が中心になります。そのような意味で、念仏を称(とな)える声はわたしたちの声であると同時に、「真実の依り処に立ちなさい」という阿弥陀仏の本願の呼び声なのです。「正信偈」は、その呼びかけに応じる本願の念仏によってはじまるのです。

※　調声人…お勤めの調子を定めて発声し、音程を導き拍子を調える人。